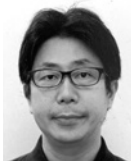
特派員の目　エルサレム

トルコ人の本音



三木　幸治

トルコ人の本音を聞くのは、意外と難しい。

２０１６年のクーデター未遂事件以降、トルコのエルドアン政権は厳しい言論統制を敷くようになった。政権批判をした記者を「偽情報を流した」として拘束するケースも多い。政権を非難したソーシャルメディアの投稿に「いいね」を押した公務員が解雇された、という話すらある。

２月６日に起こったトルコ・シリア地震では、政府の初動が遅れたことや、住宅への耐震政策が不十分だったことに批判が集まるかと思われた。だが、メディアは政権批判を控え、住民の口も重い。

私が現地で、住民の本音が聞けたのは車の中だった。トルコではヒッチハイクの文化が残り、特に公共交通が停止した被災地では、ヒッチハイクが盛んだった。私は宿泊地と被災地を往復している間、多くの人を車に乗せ、話を聞いた。

南部アンタキヤ近郊の小さな村に住むヤクプ・エイダンさん（40）は政府の対応に憤っていた。被災した都市には食料やテントなどの物資が集まるが、少し離れた村には地震から１週間近くたっても、何も支援が来なかったという。人々は自分でテントを作り、雨露をしのいだ。「広い範囲で地震が起こったので、支援が遅れるのは理解するが、それにしても遅すぎる」と嘆いた。

南部カフラマンマラシュ付近では、住民の捜索に当たるトルコ災害緊急事態対策庁（ＡＦＡＤ）の男性職員（28）も乗せた。彼はイラクで人道支援をしていたが、地震が起きたためトルコに駆けつけようとした。だが入国のビザが出ず、数日間、国境で足止めされたという。ＡＦＡＤは内務省の傘下にあり、ビザは外務省が担当する。省庁間の連携が不十分で、活動が遅れた。彼はこんな話もしてくれた。「政府の初動は全然だめだった。中央集権を強化したため、災害時も現場が自らの判断で動けず、上の指示を待っていた。それで救助が遅れたんだ」

政権への不満が見えにくいトルコ。だが、国内だけでも４万７０００人以上が死亡した震災への怒りは、マグマのようにたまっている。トルコは５月に総選挙を控える。住民は政権にどのような判断を下すのだろうか。